

心までぬれそぼった桑の葉とり

無職 土屋 政江

(群馬県 91)

私の生まれ育った家は養蚕が唯一の現金収入だった。父は早くに亡くなり、母と兄と力を合わせ、一生懸命飼育した。蚕を「おこさま」と呼んだ。

当時、大抵の家は春蚕はるごと秋蚕あきごの、1年に2回蚕をした。蚕は桑の葉しか食わない。それぞれ約1カ月の飼育期間中は1日も桑とりは休めなかった。

雨の日はつらかった。萱すげでできた蓑みのを着て、桑を切って、玄関の土間に運び入れた。そして座敷に何本も

縄を張り巡らせて、桑の枝をひっかけて、ぬれた桑を乾かした。ぬれた桑を2階で飼育している蚕にやると、「蚕が死ぬ」と言われたからだ。蓑をまもっていても体は雨と汗でぬれ、心までぬれそぼった。

「百姓はやだな。なんでこんな苦勞をするんだんべ」と思った。

蚕をしていない時期の雨の日はうれしかった。畑仕事を休めるからだ。「おしめり祝いだ」など言っていて、大ごちそうのすいとんを入れたお汁粉を作って食べたり、友達の家へ遊びに行ったり、本や雑誌が読めたりする楽しい休日だった。